
鋼の慟哭（仮題）

カッパのT A T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の慟哭（仮題）

【Nコード】

N6140F

【作者名】

カップのTAT

【あらすじ】

その日まで、俺たちは普通の人間だった。誰もに自分の生活があった。そしてその日、突如としてその全てが奪われた。なぜ、俺たちは武器を取るのか。なぜ、俺たちは戦わなければならないのか。平和を求め、奪われた日常を求め、俺たちは立ち向かう。これは、未知の巨人、NOAHとの戦闘に巻き込まれた、普通の人々が生きた証。

1（前書き）

この物語には、過度な暴力表現や、グロテスクな描写が含まれます。
閲覧の際は、ご注意ください。

全ては、この日から始まった。

その日曜日は、なんて事の無い、ごくごく平凡な日曜日になるはずだった。これまで俺は、そうやって毎日を過ごしてきた。何か特別な事件に巻き込まれることも無く、ありきたりな、どこにでもいる高校3年生、18歳だった。

あの時の俺は、間違いなく、普通だった。早く進路を考えろと迫る口うるさい母親。それをなだめる放任主義な父親。なかなか兄離れをしてくれない妹の渚。学校に行けば、毎日をバカやって過ごす級友たち。それなりに、満ち足りた生活だった。

心のどこかでは、この生活を退屈だと感じていたこともあった。でも、今にして思えば、それはかけがえの無い、幸せな時間だったと思う。何事もなく、当然のように訪れる平凡な明日を迎えること。これが、何よりの幸せなのだと、俺は今、改めて思う。

そしてこの幸せだった時間は、この日に全てが崩壊し、俺たちから奪われた。

……いや、もっと以前から、崩壊は始まっていたのだ。きっと。

その日は渚が珍しく、俺を買い物に誘ったのだ。理由を尋ねても、渚は顔を赤らめながらただ笑ってごまかすだけ。まったく。服採びを手伝って欲しいというのだが、俺に女の子の服の良し悪しなんて分かるわけが無い。「男の人が見て、どんな服がかわいいのか、参考にしたいんだ」なんて言われても、正直、男は服なんて見てないからな。よほど変でない限りは、似合ってさえいれば、かわいく見えるものなんだ。

しかし、そんな反論もむなし、俺は強引に数年前に隣町中心の駅前に来た、巨大ショッピングモールへと連れて行かれた。ショ

ツピングモールは駅とペDESTリアンデッキで直結しており、平日でも賑わっている。特に今日は日曜ということもあり、学生や家族連れでごった返していた。ショッピングモールは広場を中心として建物が広がっており、休日には広場をイベント会場とし、バンド演奏やお笑いライブなど、様々な催し物をしている。

「わあ、見て、お兄ちゃん、懐かしいのやってるよ！」

渚は子供たちの大群で固められた、広場中央の、大階段の正面に作られたステージを指差した。背の低い人ごみの奥に見えたそれは、奇怪なデザインの怪人と、赤、青、黄、緑、桃のコスチュームを纏った、正義の味方だった。

「ヒーローショーか、懐かしいな〜」

「でしょ〜！小さい頃はよく見たもんね〜」

幼い頃、日曜日の朝に必ずお茶の間にやって来た正義の味方。平和のために悪と戦う、5色の戦士。あのヒーローたちは今どこで何をしているのかと思っていたが、まさかこんな、地方のステージに立たされていたとは。

ヒーローたちは何やら決め台詞を言いながら、5人組のポーズを取った。すると子供たちからは黄色い声援が。それまで律儀にも黙って待っていた、全身黒尽くめの戦闘員たちが、一人ずつ飛び掛り、そしてわざとらしく吹っ飛ばされていく。

弱きを助け、悪を滅ぼす。そんなヒーローはこの世にはもういないのだろうか。悪人が増長し、弱者は搾取され続ける。一体誰がこんな世の中にしたのだろう。こんな世界にこそ、あのヒーローたちが必要なんじゃないか？ああ、英雄は死んだのか？

そんなヒーローたちを後にし、俺たちは買い物続けた。全てが終わるカウントダウンが、もう始まっているとも知らずに。

「ねえお兄ちゃん、この紫のと、黄色のと、どっちがかわいいと思う？」

「だから分からんって！そもそも、俺に聞くのが間違ってる」

「直感でいいんだよ。パツと見て、どっちがかわいいか！」

そう言いながら、渚は二着の服を交互に自分の正面に掲げ、俺に見せ付けてくる。店の内外にはカップルと思しき男女が数組いて、俺たちもその中に紛れて買物が続いていた。きつと外から見れば、俺たちだってそう見えるのかもしれない。

「知らんって！店員さんにでも聞いてみるよ」

「もー、わたしは、お兄ちゃんの見解が聞き……」

そこまで言って、渚の声は何者かの悲鳴にかき消された。なんだ？俺と渚は振り返った。後ろには、ブティックの巨大なガラス窓。このブティックは3階にあり、そしてその窓越しには、シヨッピングモールの広場が広がっている。悲鳴はそこからだ。次々と飛び交う、悲鳴、怒声。そして、逃げ惑う人々。

「え……、何？どうしたのかな……。さっきのシヨー？」

「まさか……、シヨーじゃ普通、大人は逃げないだろ」

俺たちは、店を飛び出した。他の客や店員も、同じように出てきた。デツキの柵に身を乗り出し、広場を見下ろす。広場には、大勢の人がいて、そして全員が逃げ惑っていた。そして、その逃げてきた先には、暴れ狂う何か。何だ、あれは。

「なにあれ、やっぱりシヨーの続き？やり過ぎでしょ……」

渚がポツリと言ったが、あれがシヨーな訳があるか。

そこには、人がいた。いや、人ではない。人の形をした「何か」がいた。全身には体毛がほぼ無く、不気味なまでに白い皮膚をしている。身長はとても大きく、普通の人間の倍近い。その全身を纏う筋肉はとても発達しており、まるでプロレスラーのような体格をし

て、暴れ散らしている。そしてその大きな手には、何か赤いものを握っていた。あれがヒーローショーの怪人か？まさか。

普通のヒーローショーでは、正義の味方は倒れない。完璧なまでの、勧善懲悪のストーリーに仕上がっているはずだ。それが、肝心なヒーローは今、どこで何をしている？こんなヒーロー物があるかよく見れば、白い巨人の手に握られ、真っ赤な全身タイツを着たそれは、先ほどまでステージに立っていた正義の味方だった。

白い巨人は、握り締めた正義の味方を振り回した。その度に赤いコスチュームが辺りの街灯や植木に衝突し、鈍い音を立てる。そしてそのまま、巨人はヒーローを放り投げた。ヒーローはどこかへ向かって飛んでいき、そして嫌な音と共に、レンガ造りの地面に頭から落ちた。もう、ピクリとも動かないようだ。

「いやああああああ！！」

正義が敗れるヒーローショーがあるか。俺は渚の手を取り、走った。目指す方向は無い。とにかく、逃げるんだ。辺りを見回すと、巨人は1体だけではなかった。入り組んだ建物の影から、もう1体、もう1体と次々に現れてくる。ちくしょう、どっちに逃げればいいんだ……！奇抜なデザインを狙ったショッピングモールの通路は、複雑に入り組んでいる。通い慣れた俺でも、中々思った通りに歩けないほどだ。何の規則性も無く、でたらめに配置された通路と階段を、ただただひたすらに走り、階段を転がるように駆け下りる。そして路地を曲がり、雑貨屋と文房具屋の間を抜けると、その先の喫茶店の角からまた、あの白い巨人が現れた。きびすを返し、すぐに手前の階段を駆け上がる。踊り場まで上がると、向かいに別の階段の踊り場が……、あれはさっき俺たちが通った階段が見えた。そこでも一人の男が白い巨人に追い詰められており、逃げ場を失い、柵を乗り越え飛び降りた。もちろん、着地など出来るわけが無い。2階と3階を結ぶ階段の下は、1階の地面だ。彼はそこに落ちて、動かなくなった。

その階段を駆け上がると、また路地を二つほど曲がり、駅のほう

に向かつて走った。このショッピングモールは、そのまま駅と直結している。そこまで逃げれば、何とかなる。そう思った。元々は商品だった、カラフルな衣服が散乱する狭い通路を駆け、角を曲がり、エレベーターの脇を抜ける。軽食屋の脇のエスカレーターを駆け下り、銀行のATMの脇を抜ければ、そこは駅へと続くペDESTリアンデッキだ。ここまで来る間に、幾つもの、血まみれになり動かなくなつた人たちを見た。俺と渚は、そのすぐ隣を走り抜けた。もう、心臓はどこまでも暴走している。走っているからだけではない。

恐怖。迫る死。あの巨人に捕まれば、死ぬ。

「渚、もう少しだ！駅まで行けば……！」

そう言いながら駅の方へと向き直り、絶望した。小奇麗に整備された駅の改札口付近にも、あの白い巨人が待ち構えていた。駅前交番勤務と思われる警官が、拳銃を構えていた。発砲しているようだったが、それに効果があるようには見えなかった。ペDESTリアンデッキの上では、ショッピングモールから逃げ出した人々と、駅から逃げ出した人々との動線が交錯し、そこは阿鼻叫喚の地獄絵図となっていた。

駅はだめだ。俺はまた引き返し、ショッピングモールの広場へと通じる階段を駆け下りた。広場にいた人々は大概が既に逃げ出し、そこに残っているのは、もう動かない人間だけだ。だとすれば、人ごみの中よりは幾分か安全かと思った。それにここなら、見通しが利く。いくらでも逃げ出せる。そのまま、広場を走り、人工池の脇を抜け、中央の、大階段……、ステージがあつた辺りまで走った。

「きゃ……！」

後ろから、渚の短い悲鳴が聞こえた。振り返ると、何かに躓いて転んだようだった。なんだろう。渚の足元を見た。それは、幼い子供の死体だった。

「いやっ、いやああああああ……！」

泣き叫ぶ渚を引き起こそうとするが、だめだ。完全に腰が抜けているようで、もう立ち上がれない。

「ばかやろう！立て！逃げるぞ！殺されるぞ、渚！！」

「いやあああつ、いやあああああつ……」

頭を抱え絶叫する渚の腕を掴み、必死に立たせようとするが、な
んという事だ。どこから現れたのか、すぐ目の前まで巨人が迫っ
ていた。巨人は何かを叫びながら、こちらへ向かって突進してくる。
そして、俺の目の前で片腕を振り上げ、払った。

俺の目の前にいた渚が、一瞬、どこかへ消えた。巨人が腕を払っ
た方へ目をやると、渚はそちらへ吹き飛ばされ、側のバーガーショ
ップのウィンドーを破っていた。

俺は渚へ駆け寄った。巨人はどこか、別の方へとまた駆けて行っ
た。

「渚！」

割れたガラス窓を潜り、ガラス片が飛散する店内へと駆け込む。
その中央に、倒れたテーブルや椅子の下敷きになり、傷だらけにな
った渚が倒れていた。

「渚！大丈夫か！今救急車を呼んでやるから……」

俺は渚を抱き起こしながら、自分のポケットをまさぐり、携帯電
話を探した。渚は力なく、ぐったりとしていた。そしてゆっくりと、
目を開く。

「おい、渚！しっかりしろ！おい！」

「……おにい、ちゃ……」

「渚、大丈夫か！？しっかりしろ！返事しろよ！おい！」

俺は何度か、渚の頬を叩いた。しかし、ゆっくりと伸びてきた腕
が俺の頬に一瞬だけ触れ、すぐ、がくり、と落ちた。それっきり、
渚は動かなくなった。俺の腕の中で。

その後、俺は何かを叫んでいたんだと思う。その後、何がどうな
ったのか、実はよく憶えていない。

ただ、走っていた。逃げていたのか、それとも渚を殺した巨人を
追いかけていたのかは分からない。ただ、半狂乱だった。だから、

すぐ後ろから迫ってきた巨人の存在に、そいつに足を掴まれるまで、俺は全く気づいていなかった。

薄れ去っていく意識の中、俺は自らの死を悟った。きっと、俺もあの、死体の大群の一部になるんだ。そんな事を考えていた。しかし、運命は俺を見捨てなかった。これが誰の計らいなのか…、神か、悪魔か、それを知る術は無いが、俺にまだ生きていろ、と。その代わりに、俺に天命を与えたのだ。一度死に掛けたこの命を、まるで弄ぶかのように。

目が覚めるとそこは、真っ白で清潔なシーツを敷いた、ベッドの上だった。辺りを見渡すと、ここは壁紙も、天井も、調度品も、全てが白い部屋だ。大して大きな部屋ではないが、部屋の中には他の誰もおらず、俺が寝ているベッドと、枕元に棚があるだけなので、やたら広く感じた。その中で、片開きの引き戸だけが、金属の地の色をしている。天井に据え付けられた蛍光灯が、煌々と部屋を照らす。

見ると、俺は淡い青色をした、薄手の浴衣のようなものを着て、口元には透明なマスクを付けられていた。体の数箇所にはケーブルの端子が貼り付けられ、それが全て、俺の隣にあるモニター装置に繋がれていた。静かな部屋の中で、俺の心臓が刻む、鼓動を交換した電子音だけが、規則正しく支配している。ああ、ここはきっと、どこかの病院か、と思った。

あの時俺は、あの白い巨人に襲われて、そして…、憶えていなかった。…俺は、助かったのか。俺が病院に来ているなら、渚も運びこまれたんだろうか。

俺が起き上がり、部屋の中をキョロキョロと見回していると、ドアが無機質に開き、見知らぬ男が一人、入ってきた。その男は、白衣を着ていた。医者か。

「気が付いたようだね」

白衣の男は俺に近づきながら、優しく話しかけてきた。そう歳をとっている様には見えないが、白髪頭で、やたらと老けて見える。医者と言うには、どうにも頼りない感じた。しかしどこと無く優しい感じで、それでいて憂いを帯びた顔立ちの男だ。

「うん、もう脈も呼吸も安定している。外しても大丈夫だろう」
そう言いながら、男は俺のマスクを外し、モニターの電源を落とした。

「はい…。あの…、ここはどこなんですか？俺…」

「神崎、優斗君だね？」

「…どうして俺の名前を？」

「悪いとは思ったが、荷物を調べさせてもらった」

男は、白衣の胸ポケットから俺の学生証を出した。

「失礼、まずは自分が名乗るべきだったね。私の名は、柿本謙三。よろしく」

「はあ…」

「君のほかの荷物や着ていた服は、全部ここにしまつてあるよ」

そう言いながら、柿本と名乗ったこの男は、俺が寝かされているベッドの隣にある棚を指差し、その上に俺の学生証を置いた。

「あの…、俺の妹は？神崎渚は、ここにはいないんですか？」

「神崎君、落ち着いて、私の話を聞いて欲しい」

「…はい」

柿本は元々落ち着いた声質のようだが、さらにゆっくりと、そつと話した。

「…あの日の戦闘で、民間人にも多くの犠牲者が出た。君もその中の一人だった。私が君を発見した時、君はまだ息があつた。そこでこの研究所に連れ帰り、…勝手とは思ったが、手術させてもらった。一命を取り留めるためだった」

「…研究所？」

「ここは病院ではないし、私も医者ではない。私は科学者なんだ。ロボット工学を専門とするね」

「ロボット？…手術？」

柿本は、ゆっくり頷いた。

「…落ち着いて、君の右手を見てみるんだ」

俺は恐る恐る、真っ白な毛布に隠れた右手を出した。そしてゆっくりと、握っていた拳を開いた。

それは、少なくとも俺の知っている、俺の手ではなかった。

機械。

人の手の形はしているが、それは人の手ではない。何か金属のような物で出来ており、関節の隙間からは、何やらチューブやシリンドーが見え隠れする。そしてこれは、俺の意思通りに稼動し、その度に内部からは機械動作音が聞こえる。俺の右肩から先、俺の右腕があつた場所は、すっかり、この手の形をした機械にすり替えられていた。

「な…！」

言葉を発することも出来なかった。俺はとつさに、他の四肢も確認した。左腕は間違いない、俺の腕だ。毛布をめくり上げ、着ていた病院服をまくり上げ、脚を確認した。右足は膝から下が、左足は股関節から、同じように機械になっている。そして四肢の機械を固定している俺の胴体だけは、ほぼ元のままだった。違っているのは、腹部と胸部の数箇所に、縫い合わせたような傷痕がある事くらいか。「ここに来たとき、君は右腕、両脚切断、内臓破裂の重体となっていたんだ。…本当に、申し訳ないとは思ったが、君を助けるためだった。どうか許して欲しい」

そう言い柿本は、深々と頭を下げた。

俺は、何一つとして理解できていなかった。まだ俺は眠っていて、夢を見ているのではないか。そう思った。

「あの…、何なんですか？何もわかんないですよ。あの日、何があったんですか？なんで、病院じゃなくて、こんな…」

柿本は少しだけ俺から目を逸らし、こつ言った。
「付いて来てくれ」

俺は柿本に導かれるまま、部屋を出た。足の代わりに、二本の機械を動かしながら。機械の脚は、とてもスムーズに稼働し、忘れていれば元の体と変わらないようにさえ感じた。しかし、それでも違和感を覚えずにはいられない。歩けば、リノリウム張りの床から、カシャ、カシャと金属的な足音が鳴り、モーターやシリンダーの稼働する音が聞こえるのだから。

「うん、動作には問題ないようだね」

柿本は俺に話しかけながら、長い廊下をゆっくりと歩いた。この廊下には、というか、先ほどの部屋もそうだが、窓が無い。ただ白く装飾の無い壁と、等間隔に並ぶ金属製のドアだけが、続いていた。「NOAHが本格的に活動を始めたのが、君が襲われた、あの日からだったからね。君が何も知らなくても無理は無い。あれから君は、1週間眠ったままだったから」

「^{ノア}NOAH？」

「ああ、あの化け物……、白い巨人の事だよ。我々が便宜的に付けた名前だ。Neo human who evolves Over the limit Adversary of Human raceの略だ。直訳すると、人間に敵対する、限界を越え進化した新人類」

俺はあの日の惨劇を思い出す。あの醜悪な怪物の顔。人の形をした悪魔。いや、鬼だろうか。

「奴らの正体は何者で、どこから来たのか、何も分からない。ただ、突如現れ、人間を襲いながら爆発的に増殖し、地上を占拠している」柿本が一つのドアの前で止まった。他のドアとは違い両開きで、その脇には金属のパネルが壁面に埋まっていた。これは、エレベーターだ。柿本がボタンを押すとすぐにドアが開いた。ゴンドラはこのフロアに停まっていたらしい。俺たちは、エレベーターのドアを

くぐった。

「あまりに急な、それも大群での出現だったからね、警察や自衛隊も、ほとんど何も出来なかった。すぐに出勤した地元警察では手に追えず、自衛隊の出勤要請が掛かった。それでも、その時にはNOAHは増えすぎていた。ましてや、奴らが現れたのは市街地の真ん中だったからね。警察や自衛隊は、むやみに攻撃することも出来なかったんだよ。すぐ側には民間人がいるかも知れないんだからね」

重力が増加しているが、エレベーターの天井付近に表示される数字は小さくなっていく。ということは、ここは地下なのか。だとすれば、随分と深いことになる。乗り込んだフロアの、エレベーターのドアの上部には、58と書かれたプレートが張り付いていたから、「私たちに出来たのは、逃げることだけだった。警察も自衛隊も、何も出来ないまま、みずみず殺されるだけだった。民間人だけじゃなく、多くの警官や自衛官が殺されたんだ」

小さなエレベーターの中は無機質で何の装飾もされておらず、フロアの案内すら無い。ただ、静かな動作音と、増加する重力だけがある。

「現在、K県中央部は既にNOAHの勢力下に置かれている。今のところNOAHはどこかに身を潜めているようだが、再度侵攻は時間の問題だろう。警察も自衛隊も、前線を守るので精一杯のようだし」

「じゃあ、今は……」

「1週間経って、街は落ち着きを取り戻しつつあるが、でも、いつ訪れるとも知れぬNOAHの恐怖に、皆が怯え、過ごしている」

「……」

「そこで政府はNOAHと対抗するため、あるプロジェクトを立ち上げたんだ。そして、私の研究所に声が掛かった」

「でも……、それとこれと、一体何の関係があるんですか？　これは一体何なんですか？」

俺は柿本に向き直り、右肩から生えた機械を見せ付けるように前

へ、柿本へ差し出した。

「この扉の奥に、その答えがある」

エレベーターがゆっくりと停止した。

ドアの上部のマグサインには、B50と表示されている。地下50階だ。扉が開くと、そこには闇が広がっていた。照明が何一つ点いていない。エレベーターから溢れる灯りだけが、ドア付近を照らす。その狭い範囲に見えるのは、ただリノリウムを張っただけの床だけだ。柿本は黙ったままそのフロアを進んでいく。俺は柿本に続いてエレベーターを降りたが、すぐに柿本の姿を見失ってしまう。僅かの時間を置くと、エレベーターのドアが自動で閉まり、遂に光源が無くなってしまった。

「ロボット工学の博士だと言ったね。この施設は、私の生涯を賭けた、秘密の研究所だったんだ。そして、その研究と言うのが、これだ」

暗闇の中から柿本の声だけが響き、急に照明が灯った。スポットライトだ。それに映し出されたのはステージではなく、大きな作業台だ。中央には、人間の形をした機械があった。人体模型のように直立した姿勢で静止している。その体のあちこちからケーブルが生え、そしてそれは部屋のあちこちへと延びている。すぐ近くに立っていた柿本と大体同じ、普通の人間と、大して変わらない大きさだ。そしてその部分部分には、見覚えがあった。ワントンポ遅れて灯った蛍光灯に映し出された、俺の体。右腕。両脚。目の前の機械と同じ形をしている。

「そうだ。君の体に使ったのも、これと同じものだ。まあ、大きさなどは君の体格に合わせて調整してあるが」

よく見れば、そのロボットは1体だけではなかった。その後ろに、多数のロボットが鎮座している。

「このロボットは、対NOAH決戦用ヒューマノイドユニットだ。開発コードからとって、アルファユニットと呼称している。私はこいつの研究に、一生の情熱を注いできたんだ。一体、これまでにど

れ程の年月を掛けたか……」

柿本はその内の1体に近づき、その頭部を撫でながら話を続けた。
「そして躯体の構成まではこぎ付けた。でも、どうしても完成させることが出来なかった。各部分の動作は完璧だったのだが、自立歩行、自律動作が出来なかった。このサイズで、人間とほぼ同じ動作が出来、なおかつ戦闘が前提の機械だ。どうしても、こいつに搭載できる、小型でハイスペックのコンピュータが、AIチップが作れなかった。脳が無ければ、こんなものはただの人形だ。しかし、機械としての動作は完璧なんだ」

「それじゃあ……」

「ああ。そこで、君たちの肉体の治療に、こいつを利用してもらった。こいつを動かすことは出来なかったが、義肢として、……勝手なことかも知らんが、私の研究で君たちを救うことが出来て、嬉しいよ」

俺は自分の手足と、目の前の機械を見比べながら考えた。

「ちよつと、待ってください。あなたが……、柿本さんがこの人型ロボットの研究をされていたのは分かりました。でも、……なんだろう、話が繋がらないって言うか、見えてこないって言うか……」

俺は嫌な予感がしていた。柿本はこの「アルファユニット」を何と紹介した？ 「対NOAH決戦用ヒューマノイドユニット」だと？

「つまり……、なんで俺を改造したんですか？」

柿本は俺に向き直り、後ろ手に組みながら、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「そうだね。今までの話は、君の質問の答えじゃない。まあ、もう一つ聞いてくれ。……というか」

白衣を纏った初老の科学者は、俺の目の前で、まっすぐに俺を見ている。

「君に、頼みがあるんだ。神崎優斗君」

「……なん、ですか？」

その口から発せられた言葉は、俺の悪い予感を裏切ってはくれない

かった。

「神崎優斗君。私たちと共に、戦って欲しい」

「……え？」

何だつて？

「……嫌かね？」

「俺に、あの化け物と戦えと？」

「そうだ」

柿本の目は、まっすぐと俺の両目へ向けられている。

「ふざけるな！ 警察も自衛隊も敵わなかった相手なんだろう？ それと闘えだつて？ むざむざ死ねといってるのも同じだ！ 第一、俺は元々、ただの一般市民だ！ フツの高校生なんだ！ この俺に、あんなものと戦える力があると思ってるのか！！」

「力なら与えた」

「……！」

柿本は力強く、低く、そう言つて俺の右手を、機械になった右手を握つた。

「その右手を見てくれ。私がどうして、アルファユニットの開発を始めたのか、その答えを話そう」

柿本は悲しそうな目をしていた。

「本格的に、NOAHが活動してから1週間と言つたね」

「……ええ」

「実は、もつと前からNOAHはいたんだよ。今から……、そうだね、20年ほど前になるのかな。私は、妻と、まだ幼かった2人の娘を、NOAHに殺されたんだ」

俺は息を呑んだ。

「当時から私は、大学の院で機械工学を専攻していたのだがね。私には、妻と、2人の娘がいたんだ。毎日を研究に明け暮れていた私は、ある日家族を、ドライブに連れて行ったんだ。その山中でね。交通の少ない登山道だったから、他に誰も見ていなかったんだ。急に車道に飛び出してきた何かを避けきれなくて、私の車は崖下へ転落した。私だけが車外に放り出されて、結果私だけが助かったのだが。はじめは、熊が何かだと思ったんだが、違った。それが、私とNOAHとの出会いだ。初めて奴らを見た私は、それは鬼かと思っただよ。後から後から、次々とNOAHが現れて、そして私の目の前で、乗っていた車が襲われて、妻と娘たちは、NOAHに殺されたんだ。」

「警察には……、言わなかったんですか？」

「もちろん言ったが、取り合ってなどくれなかった。私が見たものは何かの野生動物。妻と娘は事故死、と言うことで片付けられた。ショックで記憶が混乱しているとか、頭がおかしくなったとか、色々言われもした。それよりも何よりも、何も出来ずにただ逃げたような自分がたまらなく悔しかった。後から調べてみれば、NOAHの目撃情報や、被害にあったと言う話は、伝説とか、怪談とか、そんな次元ではあるが地元では何件も報告されていたそうなんだ」

柿本は遠い目をしていた。

「そこで私は、NOAHへの復讐を誓ったんだ。それから20年間……もう20年にもなるのか……。私は、ずっとこの日を夢見ていた。そしてこの日のために、こいつの開発を続けてきたんだ」

復讐のため……だと？

「つまり、あんたの復讐のために、俺を利用しようつてののか？」

柿本は俺に向き直ったが、けれど何も言わない。

「自分でロボットの脳みそが作れないから、俺を利用して、ロボット

トを完成させて、それで復讐しようつてのか!？」

俺は柿本に向かい、柿本の白衣の肩を両手で掴んだ。

「あんだ、人を何だと思ってるんだ! 俺はロボットの部品なんかじゃない! 復讐がしたいなら、一人で勝手にやってる!」

「……君は、悔しくは無いのかね?」

柿本の、絞り出すように発せられた言葉は、けれどどこまでも力強かった。

「君は、自分の家族が殺されて、日常を奪われて、それでも悔しくないのかね!？」

ふと、渚の顔が頭をよぎった。

「私は悔しかった。妻を、娘たちが殺されたときも。そして、先の戦闘でも、私の下に集った同志が何名か、命を落としている。家族が殺されて、仲間が殺されて、悔しくはないのか。ただ黙って、殺されるのを見過ごせと言うのか」

柿本は、押し殺したように、静かにそう言った。しかし、その瞳には、強い力が込められていた。

「それに、日常を奪われたのは私や、君だけではない。あの日の戦闘だけで、数百人の命が奪われた」

俺の目の前で、何人もの人が動かなくなっていた。

「犠牲者や、その遺族だけではない。それ以外の市民も、どこに潜んでいるとも知れぬNOAHの恐怖に怯え、隠れるように生活しているんだ」

幾つもの死体を前にしても、けれど俺には渚を護るどころか、逃げる事すら出来なかった。

「確かに私は、君を君の意思に関係なく、ただ自分の復讐のためだけに、NOAHと戦う兵器へと改造した」

何も出来なかった俺の目の前で、渚は殺された。

「かつてな事を言っているのは重々承知している。けれど、この復讐は、君自身のためでもあるんだ。違うかね?」

くそつたれが……!

そうだ。柿本の言う事に、何の間違いもなかった。俺の右腕と両足を奪ったNOAHが憎かった。渚の命を奪ったNOAHが憎かった。可能であれば、殺してやりたい。そう思っていた。……しかし、それ以上に許せなかったのは、あの場所にいながら、結局何も出来ずにいた、自分自身だった。

俺がもつと強かったら。俺に力があれば。あの時、渚を護る事ができたんじゃないか。たくさんの人を、見殺しにせずに済んだんじゃないか。……でも、俺は無力だった。

ギリギリとかみ締めた奥歯に、力が入る。

「そうだよ、あんたの言うとおりだよ。でも……、だからって、……だからって、俺一人であんな化け物と戦えるわけ無いじゃないか……！」

柿本はゆっくりと俺に近づいて、俺の肩をそつと掴んだ。

「言ったはずだ。この躯体は、NOAHとの戦闘のために開発されたものだ。あわせて、君の肉体の強化も施してある」

そう言って柿本は、俺の右手を握った。戦うために作られた右手を。柿本の思いが詰められた右手を。

「それに、一人ではない。さっきから言っているだろ。私たち、と我々には仲間がいる。君と同じ、共に闘う仲間が」

俺はうなだれた頭を、上げる事が出来なかった。

「もう一度だけ聞こう、神崎優斗君。私たちと共に、戦ってくれないか？」

俺は、震えていた。

まあ、と言い、柿本は俺に背を向けた。

「無理にとは言わん。君をここへ連れてきたのは私だ。改造手術だって、勝手に施したことだ。私だって人間だ、君の意思は尊重する。

君が嫌だというのなら、それも仕方あるまい」

俺は自分の掌を見た。その右手は機械で出来ている。これは俺の右腕ではない。アルファユニットだ。NOAHと戦うために生まれた機械だ。その右腕が、脚が、俺の体に備わっている。

目の前に佇み、動くことの無い機械。そして、俺の体に備わり、動いている機械。無くなった腕の変わりに取り付けられ、俺の意のままに稼働するこれは、間違いない、俺の右腕だった。

あの時に俺は、渚を護ることができなかった。誰一人、助けることが出来なかった。逃げるだけで精一杯だった。いや、逃げることに出来なかった。あの時、俺には何の力も無かった。そんな俺に、無力だった俺に、人を、日本を、世界を護る事なんて出来るんだろうか。

右手を硬く握った。力強く。腕が震える。俺は目を硬く閉じ、握った右手で自分の胸を軽く打った。痛かった。そう、痛かった。ちゃんと痛みを感じる。そうだ。俺は生きているんだ。

これが神の導きなのか、悪魔の仕業なのかは知った事ではない。どっちだって、構わない。同じことだ。俺は、生きている。あの日死ぬはずだった。しかし柿本に導かれ、今、こうして生きているんだ。

何のために生かされたのか。

答えは簡単だ。生き残ったものに課せられた使命。

柿本は後ろを向いたまま、どこかへ歩き出した。

「すまない、無理を言っただけが悪かった。今上ってきたエレベーターに乗れば、そのまま地上に上げられるから……」

「……待ってください」

遮る俺の言葉に、柿本は立ち止まった。けれど振り返りはしない。「本当に、この体なら、あの化け物と張り合えるんですね？」

柿本は後ろを向いたまま返事だけを返した。

「そうだ。そのように設計してある。機能は、保障する」

「あの時俺は、誰かを助けるところか、逃げることも出来なかった

…。妹も、渚を守ってやることも出来なかった！ ……こんな、こんな俺でも……。日本を、みんなを守れるんですね？」

「ああ」

短い返事だったが、何故だろう、とても頼もしく聞こえた。

「……俺も、連れてってください。俺の、仲間のところへ」

後ろを向いたままの柿本の表情は見えなかったが、それでも優しく笑っているような気がした。

「よし、付いて来たまえ」

答えは簡単だ。立ち止まらずに、進めばいい。

どこへ？ 決まっている。「未来」へだ。

俺は、自分の2本の足で歩き出した。それは機械で出来た脚だったが、それでも、間違いない。これは俺の足だ。

私は決めたんだ。どんな事からも、もう逃げない、と。

あの日、目の前でかけがえの無い家族を亡くしてから、私は全てから逃げ出そうとしていた。生きることからも、逃げようとさえ思っていた。生きる事は辛い事の連続だと言っけれど、それにしてもこんな仕打ちは無理。あれから何日過ぎても、ボロボロになって、最期まで私を護ろうとした、父さんの姿が目には焼きついて離れない。母さんの悲鳴が、断末魔が、耳から離れない。夢の中にまで出てきて、私に助けを求めている。

毎日毎日、避難所の片隅で、膝を抱えて俯いて過ごしていた。誰に話しかけられても、ずっと、黙ったまま、心を閉ざしていた。他人と関わるのが、たまらなく怖かった。また目の前で大切な人を失う事が。ずっと心を閉ざしていれば、誰とも関わらずに過ごしていれば、もうあんな辛い思いをしなくて済む。そう思っていた。

手首を切ろうかと思った事もあった。死んでしまおう。死んでしまえば、もう何も苦しいことは無い。辛いことは無い。あの日みんなと一緒に死んでいたら、どんなに楽だったろう。そう思う事さえあった。でも、正直、死ぬのも恐かった。あの日から、たくさん見てきた死体。血の気のなくなった青白い顔の中で、光の無い瞳だけが、どこか虚空を眺め、その顔は最期まで恐怖に歪み、助けを求めるようだった。私もあんなのかと思うと、恐かった。

でも、病院に併設された避難所に運ばれてくる、血まみれの人たちを見ている内に……、私自身の傷口を抑える、ガーゼに滲みる血を見ている内に、思い出した。

あの日、目の前でたくさんの人が死んでいった日、私は生き残った。私はまだ、生きている。まだ、心臓は止まってない。私の体の中には、熱い血が流れている。

思い出した。私は、生きている、って。

死んでしまった人は、もう何をすることもできない。絶対に、死にたくなんて無かったはずだ。それなのに、あの日、何の前触れも無く、終わらされてしまった。そんなかわいそうなことって無いよ。でも、私は死ななかつた。生き残ることが出来た。運が良かったのか、誰かが助けてくれたのかは分からない。でも、今、こうして生きていられる。だったら、死んでしまった人の代わりに、何か私に出来ることがあるはずだ。

そう思うようになった。生きているからこそ、何か出来ることがあるんじゃないか。生きているからこそ、やらなきゃいけないことがある、そう思った。あの時、自分の命を張って、私を護ってくれた父さんと母さんの姿が、私の背中を押してくれた。

そんな時だ。私が柿本博士と出会ったのは。だから、「一緒に戦わないか」と誘われた時、私は断らなかつた。むしろ、嬉しかった。私なんか、どうせNOAHと戦っても、敵わないだろうって思ってたから。こんな私でも、役に立てるんじゃないか。そう思ったから、私なんかが戦ったって、いつかはやられて死ぬ。でもこのまま、ここで何もしなくても、いつかは死ぬ。だったら、負けてもいい。死んでもいい。少しいは、みんなの役に立ちたい。足手まといになるかも知れない。それでも、みんなと一緒に戦いたい。

死ぬのは嫌。でも、何もしないで死ぬのは、もつと嫌。どうせ死ぬなら、少しくらい、誰かの役に立って、それから死にたい。そう思った。戦っても、死ぬ。逃げて、死ぬ。だったら私は、もう逃げない。最期まで戦う。そう、決めた。

だから私は、NOAHとの戦いに志願した。

でも、柿本博士に戦闘服を見せられた時、本当のところは、逃げようかと思った。いくらなんでも、恥ずかしすぎた。最初に、仲間だ、と紹介された男性が着ていたのと、ほぼ同じものが支給されると聞いたけれど、これは着れない。そう思った。

これはまるで、どこかのヒーローショーのコスプレ衣装みたいだ。色は黒を基調としているけれど、これがら色揃えば、間違いなく特撮だ。

それでもこれを着る気になれたのは、私の他にも女性隊員がいた事と、他の隊員もみんな、命を賭けて戦いに身を投じる覚悟でいた事。そして何より、この戦闘服と、他の隊員の体に組み込まれたアルファユニットに込められた、柿本博士の思いを感じた事。見た目だけでこの戦闘服を恥じた自分を、恥じた。

個人専用に採寸された戦闘服は、黒のアタッシューケースに収められ、渡された。

中に入っていたのは、説明書、と書かれたA4サイズの紙切れが数枚と、黒と青と少しだけ緑で、布と樹脂と金属で出来たものだった。畳まれている。触ってみると、それは意外とツルツルとした肌触りで、表面には若干の光沢があった。

私は説明書に従い、それを着用してみた。いざ着てみるとなると、やっぱり抵抗があった。ただの化繊かと思っただけ、きつと違うんだろう。基本素材は伸縮性のある生地で出来ていて、割と厚手で、全身にフィットする。足にはブーツが、手にはグローブが、それぞれ同じ素材で用意してあった。

胸部や股間、関節などの急所に当たる部分には、しっかりとしたプラスチックか金属のプロテクタが付いていて、いかにも、という感じがした。他にも、背中や腰や、太股に、何かの金具がたくさん付いていた。

頭部用には、ちゃんとヘルメット型のプロテクタが用意されている。頭蓋を覆う部分と、下顎部を覆う部品に分かれていて、顎関節の動きに追従できるよう、スーツと同じ材質で繋がっている。耳の部分はスリットの様になっていて、ちゃんと音も聞こえる。説明書によれば、下顎部には通信用の無線機も装備されているらしい。きっと、額の先から伸びた角みたいな部品は、そのアンテナなんだろうと思う。そして下顎部から伸ばした生地の上に、鎖骨のプロテクタと結合するためのビスがある。これを締めると、ヘルメットと本体が結合される。

頭部プロテクタを本体と繋げようとして、少し悩んだ。肩まで伸びている、少し長めの髪の毛を、どうしようかと思った。いつその事、切ってしまうかと思ったが、心配は無かった。首の後ろ側、頸椎に当たる部分には隙間が出来ていた。これは首の関節の動きに対応するためだと思う。ヘルメット後部から頸椎用のプロテクタも伸びているので、問題は無さそうだ。この隙間から、髪の毛を出すことが出来る。

全てを着用すれば、露出している部分は、顔面だけになった。顔を覆うものは無いかと搜すと、ちゃんとアタッシューケースの、蓋に付いたポケットに入っていた。それはバイザーのような物で、鼻から上を覆うことが出来る、スモーク掛かった透明の部品だった。

私は鏡を見た。基本的なデザインは、アルファユニットと共通している。柿本博士によると、機能も極力、アルファユニットに近づけてあるそうだ。これは、アルファユニットを移植していない生体部分を補完するためだそうだ。だから、私以外の隊員のスーツには、腕が無かったり、脚が無かったりする。無くなっている部分は、アルファユニットに改造された部分だ。私みたいに、全身をスーツに包んだ隊員は、他にはいない。

集められた5人には、それぞれ、金属のプレートで出来た、ネットレスのような物を配られた。別に、アクセサリーじゃないみたい

ただ。楕円形のプレートには、ローマ字で私の名前が掘ってあった。クラスの男子が付けていたのを憶えている。ドッグタグだ。彼らはおしゃれのつもりで付けていたのだろうけど、これは、ドッグタグの本来の目的で作られたんだろう。

首から提げた、装飾用とは思えないほど重厚な鎖の先端に、私はそれに似つかわしくない、可愛らしいペンダントを繋いだ。

金具の固定に戸惑っていると、神崎君が「貸してみ？」と、脇から引ったくり、それを手伝ってくれた。

「……よし、と。できた。ところで杉浦さん、コレ、何？」

「お父さんがくれた、お守り」

それは、お父さんが最期にくれた、私へのプレゼントだった。ロケットみたいだけど、どうしても開く事が出来ない。父さんは、いつか時が来れば、開けられると言ったけど、それがいつなのか、私には分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6140f/>

鋼の慟哭（仮題）

2010年10月12日17時47分発行